

二〇一六年一〇月一四日

校舎より洩るる輪唱秋澄める
古民家の三和土に山と柿を積む
ひつじ田へ鷺の降り立つ朝まだき
野仏へ肩幅ほどの千草道
学び舎に残る灯のある秋の夜

やよい
智恵子
ぼんこ
菜々
満天

二〇一六年一〇月一三日

亡き夫の分も生きなば十三夜
疎に咲いてゐて健気なる秋薔薇
落とし水奔流となり且つ激つ
軒高くト口箱を積む魚河岸の秋

はく子
なおこ
明日香
たか子

二〇一六年一〇月二日

嶺々低き丹波の里は豊の秋
ゆく吾に辞儀する風の芒かな
うそ寒く首にタオルの厨事
婆縁に黙々と編む吊るし柿

菜々
ともえ
満天
智恵子

二〇一六年一〇月一日

実りたる稲穂確かむたなごころ
ウエディングブルーケ投げたる天高し
町なかの御苑に旅の秋惜しむ

はく子
智恵子
なおこ

二〇一六年一〇月一〇日

公園のジャングルジムに小鳥くる
園児らのゴールはママや運動会
秋桜風にあち向きこつち向き
紅葉鯛白磁の皿にはみ出しぬ
白萩の屑こぼしつぐ苔の庭

やよい
智恵子
あさこ
たか子
豆狸

二〇一六年一〇月九日

ドミノめく棚田の稲架や明日香みち
行厨や四囲の花野を籬とし

明日香
ぼんこ

二〇一六年一〇月八日

亡き母の文読みかへす灯親し
赤とんぼ芝生広しとホバリング
フェリー待つ棧橋の沖跳ねる
回廊に泉水の秋聴ききにけり

菜々
なおこ
宏虎
ぼんこ

毎日句会みのる選・二〇一六年一〇月一六日